■プロジェクト研究報告■

事例を通した教育相談の進め方に関する研究

—予防的な指導援助（第１年次）—

（その３）

教　育　相　談　部

この事例は，本人に対する学級や家族のかかわりに変化を促し，問題行動を誘発する状況を変えて，不登校を未然に防いだ実践例である。

1.　予測した問題行動「不登校」

2.　対象　中学校３年　女子（Ｓ子）

3.　問題行動予測の動機

●学級内に親しい友人がなく，周囲から話しかけられても明確に反応できず，黙ってしまう。

●親しい友人がなく，二学期当初，腹痛等を理由に遅刻すれすれに登校することが時々あった。

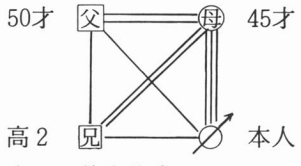
4.　資料

⑴　学業成績・欠席の状況から

●期末テストが中間から大幅に下がり，評価は数学３，保体１，その他２，欠席は３年（３日）

⑵　家庭との連絡から

●家族構成と家族システム



●本人への養育態度

父は甘やかし気味であり，母は過保護であったが最近母は学習のことで過干渉ぎみになり，厳しく当たることが増えてきている。

●対人関係

小学校の頃も友達が少なく，現在も他学級の特定の友人に限られる。

5.　予測診断（診断）

幼少児期から虚弱な体質で過保護な養育から，神経質で忍耐力に乏しく，臆病な性格である。そのため，集団についていけず孤立がちになり，学習面でも意欲がなく，劣等感が強い。

現時点では，学習面以外は両親との関係が安定しているため，問題行動は顕在化していないが，適切な指導援助がなされなければ，「不登校」に陥るものと予測される。

6.　予防仮説（指導仮説）

Ｓ子に対し，担任を中心として家族・級友・学年教師が受容的態度で接して，本人の学校生活や進路に対する意欲を高めることができれば，不登校は防げる。

7.　予防援助（指導援助）の経過の要点

⑴〔機会を見てのさり気ない話しかけ〕を多くし，Ｓ子の気持ちを受け入れ，励ましに努めたことにより，本人の情緒の安定が図られた。

⑵〔家庭との連携〕として，進路に対する母親の不安な気持ちを十分に受容し，「Ｓ子も悩んでいるので，今は指示を控えて見守っては　」と提案した。母親のＳ子への心配を受容することによって，家族で穏やかな話し合いを持つ余裕が生まれ，本人の学習や進路に対する自主性が養われていった。

⑶〔本人へのかかわり〕として，友人を求めながら積極的に友人関係がつくれないＳ子に，級友を少しずつ接近させたことで，自然なかたちでの対人適応が図られた。

⑷〔学年教師のかかわり〕として，共通理解を図り，教科担任と共にＳ子を含めた数名の生徒に努めて声をかけ，自然なかたちで励ました。

※　遅刻すれすれの登校状況はすっかり改善され，昼休みなど室内で級友とトランプを楽しむ姿が見られ，生活への意欲が高まった。

8.　考察

Ｓ子が不登校にいたらなかったのは，担任が気づきを深め，本人の情緒の安定に努めたことはもちろん，本人を取り巻く環境の調整によって，クラス内の人間的ふれあいを図ったためと思われる。

（文責　穂積　邦明）